

《講義で学ぶこと》

私が紹介するのは、生物生産学部で3年次前期に受けた【微生物機能学】の講義です。この講義は同学部の専門科目であり、三本木 至宏准教授が担当しています。前半は微生物の分類について学び、中間テストを受けた後に、後半は微生物の構造と機能について学びました。これまで漠然と「微生物」と思っていた物の詳細を知るきっかけとなりました。しかし、私がこの講義で学んだことは、それだけではありません。

さて、この講義では特筆すべき点が2点あります。1つは、**毎回の講義の後で『分かったこと』『分からなかったこと』を書く**ことです。「授業の復習をするのは試験直前、分からないことだらけで、なかなか思い出せずに一苦勞」ということはよくあると思います。しかし、この講義では毎回の授業の終わりに、その日は何を学んだか、分からないことはあったか、を振り返る時間を与えられます。その用紙は回収され、重要な質問などがあれば次の授業で解説がされます。授業を受けてすぐに復習できるため、より記憶に残りやすいのです。中間テストでも同様のことが言えます。期末試験にも前半の内容が出題されましたが、一度中間テストのときに復習しているため、それほど苦もなく思い出すことが出来ました。

もう1つの特筆すべき点は、先生自身が作成・編集した**講義ノート**を配られたことです。文章による解説だけでなく、カラーの図が豊富に掲載され、言わば教科書のようなものです。ただし、一般的に使用される教科書と異なり、見開きの左ページにしか印字されていません。そのため、右ページは先生が講義の中で話した内容を自由に書き込むことが出来ます。

最近ではスライドを用いた授業が増えています。教授が板書する授業とは異なり、複雑な図や写真を簡単に見ることが出来ます。しかし、解説を聞いてからノートにスライドの図を書き写したり解説をメモしたりする時間が無いのも事実です。「書くことに必死になっているうちに、気づけば次のスライドに移っていた」という経験をした学生も少なくないでしょう。最近では、あらかじめ使用するスライドを印刷し、プリントとして配布されることが多くなりました。ところが、大抵はA4用紙にスライド6枚程度を割り付けてあるため、図が小さくて文字がつぶれていたり、書き込むスペースが少なくて困ったりすることも多々あります。

以上から言えるのは、この【微生物機能学】の講義は講義を受ける学生側の視点に立って構成されたものだ、ということです。もちろん学生は自らの努力で講義を理解しようと努めるべきです。しかし、欲を言えば、理解しやすい講義をして欲しいと考える学生も少なくないと思います。その点、この講義は学生の視点に立ち、学生の本音を考え、

学生が理解しやすい講義へと構成されているように思います。配布された講義ノートの最後に、「私は微生物の立場に立って発酵現象やその基礎概念であるエネルギー代謝の仕組みを理解したい」とありました。この言葉が、まさにこの先生の、「相手の視点に立つ」という姿勢を反映していると思います。そして、この授業が私にとって理解しやすく、微生物が興味深いものになったため、私は現在、微生物機能学の研究室にいます。

私は博士課程前期へ進学し、学会発表やティーチングアシスタントでの解説など、自分の考えを発表する機会が増えています。その資料や原稿を準備するとき、常に気にかけているのが『どうしたら相手に伝わるか』ということです。そして、相手が何を欲しているか考えて発表に臨んでいます。それらの原点は、【微生物機能学】の講義で学びました。

講義で学ぶことができるのは、その科目の内容だけではありません。受け取り方次第で様々なことを学ぶことができます。その一例をここに示すことが出来たのではないのでしょうか。

引用： 三本木至宏『微生物機能学講義ノート』平成 21 年 4 月第 1 版